

いとをかしようあはれに侍りしことは、この(注1)天曆の御時に、清涼殿の梅の木の枯れたりしかば、求めさせたまひしに、なにがしぬしの蔵人にていますがりし時、うけたまはりて、「若き者どもはえ見知らじ、(注2)きむぢら求めよ」とのたまひしかば、一京まかり歩きしかども、侍らざりしに、西京のそこそこなる家に、色濃く咲きたる木の、様体うつくしきが侍りしを、堀りとりしかば、家あるじの、「木にこれを結ひつけて持てまゐれ」といはせたまひしかば、あるやうこそはとて、持てまゐりてさぶらひしを、「なにぞ」とて御覧じければ、女の手にて書き侍りける。

勅なればいともかしこしうぐひすの

宿はと問はばいかが答へむ

とありけるに、あやしく思し召して、「何者の家ぞ」とた

づねさせたまひければ、貫之のぬしの御女の住むところなりけり。「遺恨のわざをもしたりけるかな」とて、あまえおはしましける。繁樹今生の(注3)辱号は、これや侍りけむ。さるは、「思ふやうなる木持てまゐりたり」とて、**衣かづけられたりしも、からくなりいきとてこまやかに笑ふ。**

(注)

- 1 天曆 || 村上天皇の時代。
- 2 きむぢ || 「汝」に同じ。
- 3 辱号 || 恥辱的な評判。

「とても面白く趣深かったことは、この村上天皇の御治世に、清涼殿の御前の梅の木が枯れたので、（代わりの梅の木を）お求めになったのだが、何々殿が蔵人でいらっしやった時、（帝の命を）お受けし、『若者たちは、梅の木の良し悪しを見分けること**ができないだろう**。お前が探して来なさい』と（私に）仰ったので、京中を出歩いて探しまわったものの、（よい木が）なかったのですが、西の京のどこそこにある家に、（梅が）色鮮やかに咲いた木で枝ぶりの立派なものがございましたので、掘り取っておりますと、（その）家の主が、『木に、これを結び付けて持って参れ』と召使に言わせなさるので、（私は）『何か仔細があるのだろう』と思つて、持つて参りましたのを、（帝が）『何だ』と御覧なさると、女の筆跡で（次のように）書いてありました。

勅なれば**帝の命令であるので非常に畏れ多いことですが**  
からこの梅の木は献上いたします。しかし、うぐい  
すが**「自分が止まり木にしているあの梅の木はどこ**  
に行ったのか」とたずねてきたら、私はどのよう  
に**答えたらいいのでしょうか。**

とあったのを、（帝は）不思議にお思いになり、『何者の家か』とお尋ねになったところ、（その家は）紀貫之殿の娘御の住む所だった。『何ともすまない事をしたものだ』と、（帝は）恥ずかしながらいらっしやった。（この）繁樹の一生の恥辱はおそらくこの件になりましょう。実は、『思い通りの（見事な）木を持つて参った』と、（帝から）**褒美の衣を与えられたのも、かえって辛くなつてしまった**」と、にっこり笑う。